

(1) 専門部会第二次研究協議会での交流内容

①公開授業の様子

本時の目標：国や地域の名称を使い、そこでできることを尋ねるやりとりをすることができる。（知識・技能）

時間	学 習 活 動	指導上の留意点	備 考
10分	①Warm-up ②前回の復習 ③経路の提示	・A/B Game A 「Where do you want to go?」 C 「I want to go to OO」 A 「Good/Nice/Sounds good」 ・Let' s Sing ・前回どんなことをしたかが確認をする。 ★(ペアやグループで前回までの学習をふり返る)	ALT 主導
25分	④尋ねあいの練習 (パターンプラクティス) 止まったマスに書いてある番名とできることを読む	★すぐろくを使い、止まったマスの番名とできることを読み、反復する。(つたえる、つながら) - 例 全: Where do you want to go? - C: I want to go to OO. You can see/buy/enjoy/eat) ... - 全: Good/Nice/Sounds good/cool	すぐろく デモ 評語 A: 国や地帯の名称を使い尋ねあひができている B: 周囲の補助がありながら尋ねあひができている C: できない
10分	⑤学級内を歩き回り交流する ⑥まとめ	・5分間で行う。 - 目標がたつとじゃんけんですたすねの順番を決め、自分が笑顔に行ってみよう言やそこでできることを伝える。(伝えることがうまくまわっていない児童は、すぐろくのマスを確認しに伝える。 ・5分後、何人と交流できたかを聞く。 ・全体で何人かに当て、同じように進えてもらう。	デモ
10分	⑦Final Activity にむけて	・パドレットを使って I want to go to OO. You can ~~~ + 画像を貼り付け投稿する。	

英語すごろくは子どもたちが自ら準備した。「まとめ」の場面でパドレットで写真と文を打ち込み、早く終わった人の文を参考に自分の誤りを直して個別最適な学びになっていた。英語すごろくは、5年生のためにすごろくを作るなどワンランク上に挑戦させても良い。サイコロがデジタルだったので、転がり落ちる心配もなく発想の転換になった。参観者からは小中連携の観点で中学校の先生方にも見てもらいたい授業だったという意見があった。

助言者の柴山理香校長（北広島市立双葉小学校）からは、英語の授業準備をどうやったら先生方も楽しく準備できるのかという良い例となった。先生方で教材の情報共有をし、無理しすぎず子どもと良い時間を過ごしてほしい。また、中学校の授業を見たり、クラスルームイングリッシュを共

有したりすると良い。やり取りの中で「なぜ？」とたずねて理由を聞いてもらう楽しさと、共感、驚き、新たな発見が子どもの次の意欲につながるという示唆をいただいた。

①公開授業の様子

・各国との学校生活の違いについてわかったことなどを英文で書くことができる。〔思考・判断・表現〕

学 習 活 動	指導上の留意点	備 考
①Warm Up (5分)	・ ヒントタイズの発見 (提示された語について、英語でヒント→英語で答える)	★K7
②課題の提示 (1分)	・ 本時の課題を提示して、見通しをもつ	
本時の課題：各国の学校生活について状況を伝え合い、各国の習俗などを英文で書くことができる。		
③アクティビティの準備 (5分)	・ そのほかの担当の席について、情報を伝える準備ができていなければならない。 ・ 話すこと【やりとり】時で意識するポイントを提示して再確認 ・ アクティビティのルール説明 (スライド) ・ ALT と対話の見える表示 ・ 隣同士で一度練習	★K7
④アクティビティの実施 (6分33秒セット)	・ タイマーをセッットし、開始 ・ 早く交差できた人は、次の席について隣に書く【8分00秒】 ・ オーストラリア、アメリカ、U.K. ・ 南アフリカ、フィリピン、スペイン 【形態】 ・ 国ごとの席でスタート ・ 各国の国にのりきって対話 ・ 40人がずらした国のカードを持っている ・ 3分間の情報と英語で国名、広さ ・ 1回目と2回目、2・3分目は1・2分目とセット ・ ワークシート-D (4枚) を持って対話 ※メモをとるには対話が終わってからにして、対話に集中させる。 【質問項目】 相手の席では・・・ 1. 何をしていたところか 2. どんな活動をしたのか 3. その地の情報 ②・3分目まで対話する国について、その席の情報がみあっている場合は、先にその国の情報を読み取っている人になすねてもらう ●伸びしろ席への手立て 質問の読み方と答え方、少なくともワークシート1の表(being)について質問をたずねるようになすねてもらう	注意 相手の席に移動した際に、相手の席にいきなり、自分の席にいきなりしるは、対話や相手と会話ふきあう時間を奪ってしまう ★K8 ★K9
⑤まとめと振り返り	・ 聞き取った情報を英文で書く。(15分)	
・ 感想の交流 (5分)	・ 3分(もしくは2分)後、自分が質問できなかった国についての情報をたずねに行ってもよい	注意 相手の席に移動した際に、相手の席にいきなり、自分の席にいきなりしるは、対話や相手と会話ふきあう時間を奪ってしまう ★K8 ★K9

机間巡視での丁寧な指導や、生徒同士が積極的に英語で対話する姿、苦手な生徒へのきめ細やかな支援、わかりやすいパワーポイント資料の活用、さらに英語で感想を書かせる取り組みなどが良い点として評価された。一方で、活動に関する教師の指示をより明確に示すことや、活動時間を適切に区切って進行を円滑にする必要があるとの意見も出された。これらを踏まえ、今後の授業改善に生かしていくことが確認された。

助言者の青柳真光教頭（江別市立江陽中学校）からは、生徒が「伝えたい」「聞きたい」「知りたい」という思いをもって英語を使う授業づくりの大切さについて助言をいただいた。教師自身がコミュニケーションの手段として英語を使う姿を示すことも効果的であり、「伝え合うことがあってこそ英



語の授業」であるとの指摘があった。また、英語を使いながら身につけていく学びを重視し、文化・社会・世界などの使用場面を意識した授業展開を心がけること、さらに導入場面などでの即興的なやり取りの活動を取り入れることで、生徒の主体的なコミュニケーション力をより伸ばせるとの示唆をいただいた。

中学校2年生 単元 【ONE WORLD English Course 2】 “Castles and Canyons”

①公開授業の様子

授 業 者：山田 裕矢 教諭（北広島市立西の里中学校）

本時の目標：比較級を用いた表現を理解し、その表現を話すことができる。（知識・技能）

学 習 活 動	指導上の留意点	備 考
①Warm-Up (10分)	単語ペアチェック、エイゴダーゲの実施	
②課題の提示 (1分)	本時の課題を提示して、見通しをもつ。	
本時の課題：アニモンバトルで決めた台詞を言えるようになる。		
③前時の復習、文法のチェック (5分)	・比較級の文法をスライドを使って説明する。 1. 比較級 形容詞 er than ~ 「～よりも形容詞だ」	☆ICT スライド
④アクティビティの準備 (5分)	・アクティビティのルール説明。 ※アクティビティ詳細はスライド参照 ・黒板に決めた台詞のみ記載。	
⑤アクティビティの実施 (8分)	・ペア1, 2, 3 (勝、前後、斜め) で対戦 ・目標勝利数を伝える。 ・このあとくじで生徒を抽出し、全体で確認すると事前に に連絡。 ・タイマーをセットし、開始。教室内で話す相手を探し、 会話を。 ・生徒の様子を観察し、黒板のヒントを徐々に減らす。 ・相手のいない生徒には交流を促す、または相手になる。 ・終了後、生徒の勝利数を聞く。	☆ICT タイマー、黒板、白紙、黒板消し、紙の準備を要する。その準備を要することである。（詳細：黒板・ワーキングシート）
⑥比較の表現の全体確認 (5分)	・生徒を数名呼び、アクティビティを実施。比較級の表現方法を全体で確認。	
⑦教師と表現確認 (5分)	・アクティビティを活用し、教師とアクティビティを行い比較級の表現を確認。	
⑧振り返り (5分)	・文法の振り返り、タブレットで振り返り問題に取り組み、丸つけまで行う。	☆ICT タブレット：前時録や動画を回した比較級の表現やまじりを確認している。（詳細：黒板・ワーキングシート）

②授業分科会での協議内容

授業者からは、ゲーム性を持たせた活動を授業のメインにし、比較級を使った決め台詞を言う必然性をつくったことで、生徒が楽しく学ぶ環境をつくることができた一方で、表現したいことと形容詞の比較級の形がうまく結びついていない生徒もいたことが反省点として挙げられた。グループごとの協議では、適切な場面設定と ICT を活用した教材の工夫が長けていたとの評価があった。一方で、より自由度を高めてゲームを実施する工夫、活動の流れを常時黒板等に映し出しておくなどの工夫が有効であるとの意見があった。また、振り返り問題を紙で実施することであえて間違いを残しておくことの必要性も指摘された。

③成果と課題

助言者の堀田裕之校長（北広島市立東部中学校）からは、生徒が必然的に英語を話す工夫が教材に表われていたことが成果として挙げられた。また、「知識・技能の定着

のために繰り返しをする場面でも、場面設定の工夫をすることで生徒に動機づけをしていくことが大切だ。」との示唆をいただいた。



(2) 専門部会第二次研究協議会での協議内容

分科会A 討議の柱「資質・能力を育む言語活動（学習活動）の工夫と ICT の効果的な活用」

- グループ1 レポートを通して普段の授業で行っている実践についての交流を行った。writing 能力を育成するための指導法・生成AIを活用した実践や、小中連携を意識したアルファベット指導の実践報告等が行われた。生成AIの活用では、定期テストの問題作成をチャットGPTで作成するなどの報告があった。また、アルファベット指導ではICTを活用した実践例が紹介された。参加者間で意見交換を行い、今後の指導改善につながる有意義な時間となった。
- グループ2 「書くこと」に関する言語活動は、デジタルと紙のハイブリット型で行うことが資質・能力を高めるのに効果的なのではないかと。また、機器やソフトウェアへの不慣れにより、教師がICTを使いこなせていないという実態がある。ICT活用のメリットを踏まえた言語活動を精選し、実践を積み重ねていくことが重要である。
- グループ3 小学校の外国語活動では、デジタル教科書の歌や絵カード辞典などを積極的に活用し、専科教員ではなくても楽しい活動と、教師の負担軽減を実現している。また、ローマ字の学習では、ヘボン式の指導を徐々に導入している。中学校の実践では、音読練習や会話の練習でウェブ上の有料コンテンツやAIの活用が期待されるが、自治体による使用規制や保護者からの同意取得が必要な点、また機器の不具合が大きな課題となっている。
- グループ4 各校での実践レポートを発表し、交流を行った。授業で使用した教材の紹介やICTの効果的な活用の工夫などが紹介された。また、小学校では外国語活動の指導状況や英語専科について、中学校では日常での実践やおすすめツールなどの基本的な取り組みと、企業とのディスカッションや自主研修での外国人とのコミュニケーションなど発展的な取り組みなどを取り上げた。自校に持ち帰り、すぐに実践できる取り組みも多く、大変有意義な時間となった。

■グループ5 各校での実践レポートを発表し、交流を行った。授業で使用した教材の紹介や ICT の効果的な活用の工夫などが紹介された。また、小学校では外国語活動の指導状況や英語専科について、中学校では日常での実践やおすすめツールなどの基本的な取り組みと、企業とのディスカッションや自主研修での外国人とのコミュニケーションなど発展的な取り組みなどを取り上げた。自校に持ち帰り、すぐに実践できる取り組みも多く、大変有意義な時間となった。

分科会B 討議の柱「指導と評価の一体化を意識した授業マネジメントの工夫」

■グループ1 各校で実施しているテストの形式やその採点方法について交流した。テストの形式としては、設定されたテーマについて自分の考えを記述するライティングテスト、教師と生徒が1対1で行うスピーキングテスト、生徒が動画を撮影し提出するリーディングテストなど、工夫した取り組みが行われている。生徒たちの解答の幅が広がった分、採点も難しくなり、特に複数教員での基準を合わせることに難しさを感じている先生が多いようであった。またこのことに関連して、直近で行われた学力テスト総合Bの採点についても交流した。

■グループ2 本分科会では、「指導と評価の一体化」を意識した授業マネジメントをテーマに、各校の実践報告と意見交換を行った。単元・定期テストの出題や見取り、発話へ導く単元計画の工夫について議論したほか、AI やスピーキングテスト、ALT 活用、習熟度別授業、TT など幅広い話題も共有した。日頃の実践での課題を共に考え、今後の授業改善につながる有意義な分科会となった。

分科会C 討議の柱「小中一貫の体制づくり、小中両校種の成果と課題の共有」

■グループ1・2 小中一貫教育の体制づくりの話し合いの中で、小学校の先生方の授業が中学校に活かされていないということが挙げられた。原因として「最終目標」の違いではないかという結論になった。小学校は、日常で生かされる授業や中学校に向けての準備をしている中、中学校に上がった途端、「入試」を見すえた授業になってしまう。そのギャップで中学生が苦しんでいるのではないかという話になった。小学校と中学校が話しあう機会を作り、小学校のうちにどこまで指導したら良いかを明確化することで、中学1年生の躓きを少なくでき、義務教育9年間を通した教育が行えるのではないかという話になった。

■グループ3 小中の接続の在り方について交流した。小学校では「話す・聞く」の技能に重点が置かれているが、何のための英語教育なのか、ネイティブなみに話せる児童に育てようとするのは無理であり、またその必要もない。実生活の中で必要な表現を習得させることが大切である。中学校では「書く・読む」の知識定着を目指し、入試を意識した指導になることから、小学校では書くことに関する基本的なことを定着させることも視野に入れ、中学校では小学校での既習表現を用いることで生徒の理解を深める努力が必要であるなどの意見が出された。